

岡本かの子「老妓抄」における恋愛と〈母〉——「渾沌未分」「花は勁し」「金魚撩乱」との比較から

松本 佳純 MATSUMOTO, Kasumi

はじめに

岡本かの子の「老妓抄」(『中央公論』一九三八年十一月)は、これまでも「渾沌未分」(『文芸』一九三六年九月)、「花は勁し」(『文藝春秋』一九三七年六月)、「金魚撩乱」(『中央公論』一九三七年十月)などの作品と設定が似ていることが指摘されてきた。

拙稿「岡本かの子「鯨」・「川」——母から〈母〉へ」⁽¹⁾では、かの子作品のキーワードである母／母性に注目しつつも、新たに〈母〉／〈母性〉という視座から「鯨」・「川」の二作品を論じたが、本稿ではさらに右の四作品についても〈母〉という観点から再読したい。ここで〈母〉とは、血のつながりはないものの作中で母として機能している人物のことである。〈母〉に対して(擬似的なものも含めて)関係として子にあたる人物を〈子〉、〈母〉が〈子〉に抱く愛情を〈母性〉と呼んで字義的な意味とは区別する。

本稿では「老妓抄」を中心とした先述の四作品との比較検討から、〈母〉

とその恋愛感情の様相に焦点を絞り考察したい。これまでも、老妓と柚木の関係をめぐり、老妓が柚木に対し恋愛感情を抱いているか否かが論点となってきた。それは作中では明示されないが、構造的に類似した他作品と比較することで、老妓と柚木、さらに言えば〈母〉と〈子〉の関係を明確にすることができるのではないだろうか。

「老妓抄」における人物の関係

老妓が柚木の母のような存在であることは度々先行研究でも指摘されている。⁽²⁾ 水田宗子氏⁽³⁾は

それは、老妓が生きてきた花柳界での男と女の立場を逆転したやり方とも言えるし、夢を吸い取って生き延びるために、若い男を飼う老女とも言えるかもしれない。しかし、発明の夢を追求しつづけること以外に青年に何も求めない、老妓のいわば無償の行為は、母性愛といつてよく、その母性愛はまた、子を呑み込みつづけてしまう

側面をも備えている。『老妓抄』におけるこの老妓と青年の関係は、母子関係でもあるのであり、かの子の小説の世界には馴染み深いものだ。

(傍線は引用者による。以下同。)

と述べている。血縁関係にあるわけではないため、母と子ではなく〈母〉と〈子〉の関係である。また神田由美子氏⁴⁾は、老妓が心中しようとしたエピソードにふれて、老妓が「男」に対して「惚れる」というのは単に恋愛感情を抱くことを指すわけではなく、「母性」を抱くことだと指摘している。

老妓の援助により、柚木は研究に打ち込める時間や場所を得たものの、半年ほど経つと「専売特許を取」る難しさを実感し、金銭面が安定したことで「金を儲けること」に魅力を感じなくなっていく。そんな中で、柚木を「遊び相手」にしようとしていたみち子は彼への執着を強め、次第に柚木もみち子を妻にしたらなどと考えるようになる。それを悟った老妓は柚木に次のように言う。

本当に性が合って、心の底から惚れ合うというのなら、それは自分も大賛成なのである。

「けれども、もし、お互いが切れっぱしだけの惚れ合い方で、ただ何かの拍子で出来合うということでもあるなら、そんなことは世間にはいくらもあるし、つまらない。必ずしもみち子を相手取るにも当るまい。私自身も永い一生そんなことばかりで苦勞して来た。それなら何度やっても同じことなのだ」

傍線部で、老妓がこれまで「一人の男に本気で惚れ」なかったことが明示される。本文は次のように続く。

仕事であれ、男女の間柄であれ、湿り気のない没頭した一途な姿を見たいと思う。

私はそういうものを身近に見て、素直に死に度いと思う。

「何も急いだり、焦ったりすることはいらぬから、仕事なり恋なり、無駄をせず、一揆で心残りのものを射止めて欲しい」と云った。

「彼女が出来なかつたことを自分にさせようとしている」と感じた柚木は、「自分が無謀なその企てに捲き込まれる嫌な気持ち」を感じて度々出奔する。柚木が、「パッション」を感じていたはずの発明を放つて逃げ出す結末である。

こうした展開をうけて、「老妓抄」は老妓が柚木の生命力を吸い取る小説だという読み方がなされてきた。「何で一人前の男をこんな放胆な飼ひ方をするのだろう。」という柚木の心情を表す一節に即して、「男を飼う」というテーマが描かれている作品と読まれることも多い。それに加え、「柚木と云ふ發明を志してゐる青年を「放膽な飼ひ方」で世話をしてゐる老妓のスケッチにすぎない」⁵⁾、『老妓抄』は男を飼う小説である⁶⁾・「若い男のいのちを吸う小説である」⁶⁾といった同時代評も「男を飼う」小説との読み方を定着させるのに大きく影響を及ぼしている⁷⁾。

四作品比較の観点から

また、「老妓抄」は「渾沌未分」「花は勁し」「金魚撩乱」との類似が指摘されている。ただし、先行研究では四作品を一律に俯瞰した考察はなく、「老妓抄」と「花は勁し」の組み合わせ、「老妓抄」と「渾沌未分」の組み合わせというように、このうちのいくつかの類似が指摘されていた。

例えば「老妓抄」と「花は勁し」の類似について、田中保隆氏⁽⁸⁾は「花は勁し」の三十八歳の新興活花の師匠三保谷桂子と小布施の関係は老妓と柚木の関係の原型とも見られる」と述べているし、徐蕾氏⁽⁹⁾は「花は勁し」と「老妓抄」の本文を用いた比較を行っている。「花は勁し」については、作者のかの子自身も「肯定の母胎（自作案内）」⁽¹⁰⁾で、「二人の間の恋愛は、男が女を愛すれば愛するほど、男を擾し衰えさせ、自分に逞しさを増す。愛憐の情とは反対の結果を持ち来す。」と語っている。

一方で漆田和代氏⁽¹¹⁾は、この「男を飼う小説、若い男のいのちを吸う小説、強い生命が弱い生命を翻弄する小説」というグルーピングに疑問を呈す立場から、丁寧な本文読解を行っている。ここでグルーピングへの賛否は問わないが、これまで「老妓抄」の老妓をはじめとする女性の登場人物が、「男を飼う」「いのちを吸う」存在だという点からかの子作品へのアプローチがされてきたことを確認しておきたい。

人物配置と関係の類似

「老妓抄」は確かに、「渾沌未分」「花は勁し」「金魚撩乱」と類似している。しかし、女性の登場人物が「男を飼う」「いのちを吸う」存在であ

るという共通点からそのように述べるわけではない。これらの作品を比較すると、人物の配置やその関係に類似が見られるのである。本稿では、これまで具体的な本文の検討がなされてこなかった四作品すべてを包括的に検討し、共通する点を明らかにする。

まず、「花は勁し」について、「老妓抄」と共通する箇所を確認しておきたい。「花は勁し」の桂子は新興活花の師で、かつて「恋人同志⁽¹²⁾になりかけていた」がそうはならなかった相手、体の弱い小布施に物質的補助をしている。この物質的補助をする点が「老妓抄」と酷似する設定であり、桂子が老妓、小布施が柚木と同じ役割をしているのである⁽¹³⁾。さらには、小布施と肉体関係を持つせん子は、「老妓抄」では柚木に迫るみち子に対応している。

また、「花は勁し」は、「金魚撩乱」と類似していると多く指摘されてきた⁽¹³⁾。「金魚撩乱」には崖の上に住む裕福な家庭の娘・真佐子と、崖の下に住む金魚屋の息子・復一が登場するのだが、岡村淑美氏⁽¹⁴⁾は具体的な「花は勁し」との類似点を次のように挙げている。

「花は勁し」の〈桂子〉と「金魚撩乱」の〈真佐子〉はどちらも〈大柄な身体〉で〈童女型〉のかの子自身を彷彿させる容貌であるし、「花は勁し」の〈小布施〉と「金魚撩乱」の〈復一〉は〈神経質〉で少々僻んだ性格の持ち主である。なによりもこのそれぞれの特異な男女関係に類似が見られる。一つ目は、女性側が援助する側であり、男性側は援助される側という、家長制度が強い当時の男女関係をみても異質な関係が描かれている。二つ目は、男の生命力を削り取る程強い女の生命力であり、一つ目の類似点とあわせて女主人公の生命力

の逞しさが描かれている。

このように、両作は設定が酷似しているのである。「老妓抄」と「花は勁し」の類似については先に述べたが、同様に「老妓抄」と「金魚撩乱」も類似しているのである。「援助される側」の復一には憧れの女性・真佐子の他に、秀江という肉体関係を持った女性がなることも「老妓抄」や「花は勁し」と共通する点である。

続いて「渾沌未分」についても「老妓抄」との関わりを確認していく。「渾沌未分」では、傾きつつある家の娘・小初を、貝原という男が娶りたいと持ちかける。貝原には妻がいるのだが、水泳教師である小初の血を貝原の家系にも流し入れたいという目論見があった。一方、小初には薫という若い恋人がいたが、家を立て直すためにも貝原に貰われていくしかない。つまり、実質的には貝原は小初の家の家計を助ける存在であり、「老妓抄」の老妓、「花は勁し」の桂子、「金魚撩乱」の真佐子にあたる人物なのである。援助を受ける小初に、薫という恋愛関係にある異性がいることも、他作品と共通している点である。

「老妓抄」では、老妓が〈母〉として描かれているが、設定の酷似した他作品でも、老妓と同じ役割の桂子、真佐子、貝原は〈母〉として機能しているとみてよいだろう。なお、貝原は男性であるが、男性でも〈母〉にはなり得る。⁵⁵⁾

〈子〉の生みの母はというと、「老妓抄」「金魚撩乱」「渾沌未分」では死別していることが明示されている。「花は勁し」では、体調のすぐれないときに女中が暇をとったため、お湯を沸かすのも億劫だと小布施が述べる場面がある。そのため、母をはじめ誰とも一緒には住んでいないこ

とが分かる。いずれの作品でも、生みの母は不在なのである。⁵⁶⁾

「渾沌未分」で〈子〉にあたる小初に関しては、人物配置が「鯨」と「川」に通ずる。一つ目は小初の父が「旧家の家長本能」を有していることが書かれている点で、小初は旧家に生まれた湊、またかの女と共通点がある。二つ目は小初が「子供のうち甘いものを嫌って塩せんべいしか偏愛して喰べようとしなかった」ことである。甘いものを好まなかった点は湊と同じであるし、「塩せんべい」を好んだ点では湊とかの女と同じである。「鯨」での〈子〉・湊、「川」での〈子〉・かの女と小初には以上の共通点が見られた。⁵⁷⁾

〈母〉と〈子〉の距離

① 「老妓抄」

繰り返しになるが、老妓は〈母〉として読むことができる。しかしながら、「老妓抄」冒頭では老妓と柚木はまだ擬似的な母子関係ではない。当初は、電機器具商とその顧客という関係で、後に〈母〉と〈子〉へと二人の関係が変化していく。

ここでは、老妓のもとから柚木が逃げ出し距離が生まれるために、関係が変化していると考えられる。あるいは「花は勁し」でいえば、小布施の死によって彼と桂子との間に生死の隔たりという意味での距離が生まれる。このように個別具体的には異なる事情があるが、それぞれの作品には何かしらの〈母〉と〈子〉の距離が描かれている。以下、そのことを検証しつつ、複数の作品を跨いでそれがどのような意味を持つのか考察していく。

「老妓抄」で、老妓と柚木の身体的距離が生まれる経緯は確認済みで

あるが、老妓と柚木の心情について本文を見ておこう。

出来ることなら老女が自分を乗せかけている果しも知らぬエスカレーターから免れて、つんもりした手製の羽根蒲団のような生活の中に潜り込み度いものだと思った。彼はそういう考えを裁くために、東京から汽車で二時間ほどで行ける海岸の旅館へ来た。そこは蒔田の兄が経営している旅館で、蒔田に頼まれて電気装置を見廻りに来てやったことがある。

傍線部の理由を、柚木は自身で

柚木はここへ来ても老妓の雰囲気から脱し得られない自分がおかしかった。その中に籠められているときは重苦しく退屈だが、離れるとなると寂しくなる。それ故に、自然と探し出して貰い度い底心の上に、判り易い旅先を選んで脱走の形式を採っている自分の現状がおかしかった。

と分析している。意識的に、老妓が探しやすい場所を選んでいるのである。このような「脱走」を何度も繰り返す柚木に対し、老妓は次のように感じている。

すぐそのあとで老妓は電気器具屋に電話をかけ、いつも通り蒔田に柚木の探索を依頼した。遠慮のない相手に向って放つその声には自分が世話をしている青年の手前勝手を詰る激しい鋭さが、発声口か

ら聴話器を握っている自分の手に伝わるまでに響いたが、彼女の心の中には不安な脅えがやや情緒的に醗酵して寂しさの微醺のようなものになつて、精神を活潑にしていた。

老妓の方でも、柚木と同様に「寂しさ」を感じている。さらに老妓は次のように述べる。

「やっばり若い者は元気があるね。そうなくちや」呟きながら眼がしらにちよつと袖口を当てた。彼女は柚木が逃げる度に、柚木に尊敬の念を持つて来た。

老妓は柚木の心情を察するかのように、柚木が何度「脱走」しても必ず帰って来るだろうと考えている。だからこそ何度逃げられても「尊敬」するのであり、「もし帰って来なくなったら」「取り返しつかない気がする」のだ。

柚木が老妓に探してもらうことを前提に繰り返し出奔するのは、老妓との適切な距離を調整する試みであると考えられる。引用した、老妓の「やっばり若い者は元気があるね。そうなくちや」という言葉が、老妓にとつても柚木の出奔がお互いの適切な距離を調整するための行動であることを証明している。柚木にとつても老妓にとつても、必ず帰って来ることを前提に、一定の物理的距離を保つ必要があるのだ。

とはいえ、二人の間で約束が取り交わされる描写はない。柚木には、老妓は必ず探しに来てくれるだろう、老妓には、柚木は必ず帰ってきてくれるだろう、という期待があるからこそ、この物理的距離を前提とし

た関係が成立している。そういったお互いの信頼の上に成り立つ距離であることを考えると、心的距離はむしろ近いと考えられる。

②「花は勁し」

では次に、「花は勁し」の結末部での距離について確認していこう。

小布施は結核に侵されており、桂子とせん子とは死別する結末である。

この点から、まず生と死の隔たりという意味で距離が生まれる。「花は勁し」でも、冒頭と結末部で〈母〉と〈子〉の距離の変化が描かれているのである。

高良留美子氏⁽⁸⁾は、「花は勁し」のモデル・構想について次のように述べている。

かの子二十五歳のころから一平の回心、若い文学青年堀切重夫との恋愛、三角関係の苦悩、次男の出生と死とつづくが、のちに書かれた『花は勁し』の状況設定は、このころ岡本家に寄寓し、三角関係の苦しみから結核にかかってやがて郷里で死んだこの堀切青年との関係を思わせるものがある。「かの子の妹、錦の同情による二人の接近がかの子の怒りを買ひ、かの子はみずから重夫への恋情を絶ち切った」と年譜（渡辺正彦氏製作）にある事情は、妹が姪に変えられているものの、ほとんどそのままの形で『花は勁し』の人物設定に使われている。

小布施は死の前にせん子との子供をもうけている。かつて小布施と「恋人同志になりかけていた」こともある桂子は、そのことに嫉妬心を覚え

た。その桂子は小布施と次のような会話をしている。

「訊くなら云つてもいい。君と僕は昔から本当は愛し合ってたのだ」
小布施はまるで他人事のように淡々といった。

「私も急にそれに気がついたの。でも、どう考えても永い年月の間に結婚する気が起らなかったの」

桂子も相手の調子に並んで声だけ淡々とさせていった。

恋人にはなり得なかったものの、お互いに昔から恋愛感情を抱いていたことが明らかにされる。しかしながら、続く小布施の言葉は以下のようなものである。

「不思議な同志さ。君には何か生れない前から予約されたとしてもい、一筋徹つている川の本流のようなものがあつて、来るものを何でも流し込んで、その一筋をだんだん太らして行く。それに引き代え、僕は僅かに持つて生れた池の水ほどの生命を、一生かかって撒き散らしてしまつた——」

「生命／いのち」「川／河」というかの子の作品のキーワードが挿入され、桂子の「強い生命」に対し、小布施の「弱い生命」が翻弄されてしまうことを、小布施自身も語っている。桂子はこの発言を否定するが、小布施は次のように言う。

「嘘じゃない本当です。そしてそれは擬装した愛なのだ。生命量の

違うものの中に起る愛は悲惨だ」

今は桂子も小布施のいうことが或いは尤もかとも思えた。だが、それよりも何よりも、小布施がもはや自分に全く関係のない人間であるのに気付いて、俄かに泣き崩れて仕舞った。

心的距離がかつては近かったことを今になって確認し合うが、今の心的距離は少なくとも昔と比べ遠くなっているのだ。小布施が死去した後の桂子の心情からも、それが窺える。

小布施さん……桂子はハンカチを眼に当ててよよと泣いた……小布施さん……

だが、死んだ小布施の名を呼びながら、桂子の涙は、実は桂子自身の異常な運命や悲痛な忍苦、はげしい潜情に向けて送られている。

小布施の死によって、桂子と小布施は物理的距離に隔てられてしまう。さらに、傍線部から桂子の涙が小布施のためのもではないことが分かり、心的距離も開いていると考えられる。

③「金魚撩乱」

続いて「金魚撩乱」の距離について見ていく。

真佐子の父は実業家で、復一が金魚飼育の勉強をするための学費を補助すると持ちかける。新種の美しい金魚の販売を目論んでの申し出だった。

前掲岡村論文では、女性である真佐子が援助する側、男性である復一

が援助される側と位置づけられていた。実際には真佐子の父が援助しているわけだが、真佐子にとっても復一が金魚飼育を勉強するのは望ましかったということは、次の箇所から分かる。

そして絵だの彫刻だの建築だのと違って、兎に角、生きものという生命を材料にして、恍惚とした美麗な創造を水の中へ生み出そうとする事は如何に素晴らしい芸術的な神技であろう、と真佐子は口を極めて復一のこれから向おうとする進路について推賞するのであった。

「老妓抄」で老妓が柚木に希望を託して金銭的援助をしたのと同じように、真佐子も復一に美しい金魚を作って欲しいと思っている。望み通りに復一が専門学校で金魚飼育の勉強を始めてから、真佐子は手紙で

けれども金魚は一生懸命やってよ。素晴らしい、見てみると何も彼も忘れてうっとりするような新種を作ってよ。わたし何故だかわたしの生むあかんぼよりあなたの研究から生れる新種の金魚を見るのが楽しみなくらいよ。わたし、父にすすめていよいよ金魚に力を入れるよう決心さしたわ

と書いている。真佐子の父は、商業的な目論見の他に、真佐子の勧めもあって復一への援助を行っている。間接的ではあるが、真佐子が復一に援助を行っているとも言えるのだ。「老妓抄」をはじめとする他作品との重なりから考えて、真佐子は老妓と同じ役割を担う〈母〉として登場し

ていると考えてよいだろう。

先に引用した、専門学校で熱心に勉強している復一のもとに届く真佐子からの手紙には次のようにも書かれている。

「あなたはいろいろ打ち明けて下さるのに私だまって済みませんでした。私もう直きあかんぼを生みます。それから結婚します。すこし、前後の順序は狂ったようだけれど。どっちしたって、そうパツシヨネートなものじゃありません」

老妓が「パツシヨネ」を感じていないのと同じく真佐子も「パツシヨネートなもの」ではない生活を送っている。語の重なりだけで考えるならば、ここでも「老妓抄」と「金魚撩乱」の間に共通点を見出すことができる。

復一は、真佐子に対して次のような想いを抱いている。

何であろうと自分は彼女を愛しているのだ。その愛はあまりに感つて宙に浮いてしまつてゐるのだ。今更、彼女に向けて露骨に投げかけられるものでもなし、さればと云つて胸に秘め籠めて置くにも置かれなくなつてゐる。やっぱり手慣れた生きものの金魚で彼女を作るより仕方がない。復一はそこからはるばる眼の下に見える谷窪の池を見下して、奇矯な勇気を奮い起した。

復一は、既に結婚し子供もいる真佐子に対する恋愛感情を伝えることができず、真佐子のように美しい金魚を育て上げ自分を満足させようとし

ている。こうして真佐子が託した金魚作りが、復一の生活の主軸になっていく。しかし、真佐子の夫が家を相続し、研究費の補助が断たれる。真佐子について、復一は次のように感じる。

復一は遠くからでも近頃の真佐子のけはいを感じて、今は自分に託した金魚の事さえ真佐子は忘れてゐるかも知れない、真佐子はまず非現実的な美女に気化して行くようであつた。薄らいと湧くのであつた。

研究費の補助を失い、傍線部のように真佐子からの期待も感じられなくなった復一だが、結末部では「十余年間苦心惨憺して造ろうとして造り得なかつた理想の至魚」がこれまで放つておいた古池で泳いでいるのを発見する。

「ああ、真佐子にも、神魚華鬢之図にも似てない……それよりも……それよりも……もつと美しい金魚だ、金魚だ」
失望か、否、それ以上の喜びか、感極まつた復一の体は池の畔の泥濘のなかにへたへたとへたばつた。

真佐子を求めて金魚を作り続けていたが、出来あがつたのは真佐子よりも美しい金魚だった。それも、真佐子の補助がなく、その期待も感じられない中で出来あがつたのだ。復一が、ずっと執着していた真佐子から脱した瞬間である。

ここから、真佐子と復一の心的距離が遠くなつたと考えられる。「老妓

抄」「花は動し」と同じく、作品結末部では〈母〉と〈子〉の間に何らかの距離の変化が読み取れる。

④「渾沌未分」

最後は「渾沌未分」である。

「渾沌未分」の結末部は遠泳会の場面である。他作品と同様、結末部で〈母〉である貝原とその〈子〉である小初の距離の変化が見られる。

貝原が小初を娶りたいと申し出たときに、小初は「でも貝原さん、何もかも遠泳会過ぎにして下さい、ね。私、あなたの好い方だつてことはよく知ってるのよ」と言っている。小初には薫という恋人がいたため、貝原と薫のどちらかを選ばなければならない。小初が貝原に好意的であることは分かるが、貝原の申し出を受けたとまで思っているかは定かでない。しかし、断れば老いた父と二人暮らしの家が潰れてしまうのは明らかである。

そのような状況下で、薫に「どうせ貝原に買われて行くんでしょ」と言われた小初は、「薫さん、ついてお出でよ。東京の真中で大びらに恋をしよう、ね」と応じるが、薫には「いくら、僕、中学出たての小僧だつて、僕あそんな意気地無しにあ、なれません」と言われてしまう。

薫の弱い消極的な諦めが、むしろ悲壮に炎天下で薫の顔を蒼く白ました。

「何も、決定的な事じゃあるまいし……」と小初は云つたが語尾は他人事のように声が遠のいて行つた。小初は今日まで、貝原との約束をどう薫に打ち明けようか、と思ひなやんでいたのである。それ

に自分だとしてまだ貝原との約束を全然決定し切れない心に苦しめられていたのであるけれど、薫の方から、云い出されて却つて小初の心はしんと静まり返つてゆくのだつた。

小初は貝原と薫のどちらか一人を選ばずにいるものの、「薫さん、だけど薫さん、遠泳会にはきつと来てね。精一ぱい泳ぎっこね。それでお訣れなら、お訣れしようよ」と約束する。貝原か薫か、どちらかを選ぶその期限が遠泳会なのだ。

遠泳会では、小初と共に貝原と薫も泳いでいるが、「両方から同時に受ける感じがだんだんいまわしくなつて来た」、「反感のような興奮がだんだん小初の心身を疲らせて来ると薫の肉体を見るのも生々しい負担になつた。貝原の高声もうるさくなつた。」と小初の心情が描写されている。そして小初は「無闇やたらに泳ぎ出した。生徒達の一行にさえ頓着なしに泳ぎ出した」。さらに次の描写が続く。

小初がひたすら進み入ろうとするその世界は、果てしも知らぬ白濁の波の彼方の渾沌未分の世界である。

「泳ぎつく処まで……何処までも……何処までも……誰も決してついて来るな」

と口に出しては云わなかったが、小初は高まる波間に首を上げて、背後の波間に二人の男のついて来るのを認めた。薫は黙つて抜き手を切るばかり、貝原は懸命な抜き手の間から怒鳴り立てた。

小初はどちらかを選ぶのではなく、どちらも選ばないという選択をした。

「渾沌未分の世界」へと泳いでいくことで物理的距離をとろうとする小初の心は、傍線部から分かるように、貝原からも薫からも離れていると考えられる。

〈母〉である貝原は、物理的距離を縮めようと小初を追いかけている状況で作品が閉じられているため、「老妓抄」と同様、距離を調整している状態と言えるだろう。

ここで、四作品における〈母〉と〈子〉の、冒頭と結末部での距離の変化について、まとめておこう。

「老妓抄」では、心的距離は近くなり、物理的距離については調整している。「花は勁し」では、心的距離も物理的距離も遠くなった。「金魚撩乱」では、心的距離は遠くなったが、物理的距離に変化はない。「渾沌未分」では、心的距離が遠くなり、物理的距離は調整している。

ここで扱った四作品では、〈母〉と〈子〉が登場すると、そこにはさまざまな距離が描かれていることが分かった。「老妓抄」のように、結末部で心的距離が近く描かれる場合も、物理的距離は近くない。そうであれば、この距離こそが、〈母〉と〈子〉が描かれるときに不可欠な要素となっているのではないだろうか。

恋愛と〈母〉

老妓の恋愛感情は字義的な意味の恋愛感情だけでなく、母としての愛情を抱くことなどの指摘について、亀井勝一郎⁹⁾が次のように述べている。

氏は自己の内部に母性と恋人とを激しく共存せしめてゐるのだ。母性とは東洋の叡智に磨かれた慈愛の精神であり、恋人とは西欧の情

熱に学んだがむしやらの行為だ。

ここで、〈母〉と〈子〉の間の恋愛感情の有無を検討したい。こうした論点について、これまでの作品横断的な考察を踏まえつつ、「老妓抄」において〈母〉は子に恋愛感情を抱く存在であることを立証すれば、〈母〉は恋愛感情と母性的愛情の双方を〈子〉に対し抱くのだと言えるだろう。以下、作品ごとに比較・検討するが、その際、ここでいう恋愛感情とはどのように描かれるものであるか、という点も考えたい。

①「花は勁し」

最初に「花は勁し」の〈母〉・桂子と、〈子〉・小布施について見ていく。桂子と小布施は、お互いに愛し合っていたことを自覚している。しかし、小布施は桂子の姪で弟子でもあるせん子と肉体関係を持ち、子供を授かる。桂子は処女でなくなったせん子を一目見てそれと気取るのだが、その理由は「十六年間花に捧げたつもりで禁欲生活を続けて来た桂子には、人並以上性的鑑識感覚が鋭くなっていった」からだと明示されている。三十八歳の桂子は、小布施だけでなく他の誰とも肉体関係を持ったことが無い。しかしながら、小布施に対しては性的魅力を感じていると考えられる。

いままで恋愛ではないと云っていた小布施と桂子の交情に、桂子が顧みていくらか忸怩としていたことは、男からの体臭的慰安だった。

小布施の普通より大柄の体格が、ネルのように柔い乾草のように香ばしい体臭を持っていた。彼の持病持ちの体質の弱点から薫じ出る

ものらしい。それは必ずしも、傍に居ずとも頭に想うだけで、桂子は心が和められた。

傍線部に対し、「仕方がない——何も直接に皮膚に触れ合うわけではなし——。」と、「花にばかり捧げると誓った桂子の貞操が、こんな言い訳を時々自分に向けてしていた」ことを踏まえると、明らかに小布施の体臭から性的魅力を感じていたことが分かる。結婚をしようとまでは思わなかったものの、桂子にとって小布施は性愛の対象であると考えられる。桐生直代氏⁽²⁰⁾もこの箇所について、

桂子は小布施の体臭を直接嗅いでいるわけではない。「頭に想うだけで」と、自らの感覚を浮かび上がらせている。いうなれば、観念的な性愛の中に自らを置き、甘美な思いを享受しているのである。しかし、「仕方がない——何も皮膚に直接触れ合うわけではなし」との言い訳に、逆に、桂子の執着を読み取ることもできると思われる。

と述べている。桂子と小布施は「直接に皮膚に触れ合」い肉体関係を持つことはない。「花は勁し」では、〈母〉と〈子〉は恋愛に発展する可能性を持ちながらも恋人にはならず、性交渉も行われない。

②「金魚撩乱」

次に「金魚撩乱」の真佐子と復一の恋愛感情について見ていく。専門学校に通っていた頃の復一の心情は、「真佐子を考えるとき、哀れさそのものになって、男性としての彼は、じっとしていられない気がし

た」と描かれている。さらに「復一はこの神秘性を帯びた恋愛にだんだんプライドを持つて来た」とされており、復一が真佐子に恋愛感情を抱いていたことが明示されている。真佐子には夫がいるが、その夫について復一と次のような会話をしている。

「いま、いないのよ。バスケットボールが好きで、YMCAへ行つて、お夕飯ぎりぎりできなや帰つて来ないの、ほほほ」

子供のように夫を見做しているような彼女の口振りに、夫を愛していないとも受取れない判断を下すことは、復一に取つてとても苦痛だった。

そして復一は真佐子の夫について次のように考えている。

自分の偶像であるこの女を欠き碎かない夫ならそれで充分としなければならぬ。その程度の夫なら、むしろ持つていて呉れる方が、自分は安心するかも知れない。

復一にとっては、真佐子が愛してもいない夫と暮らしているのなら苦痛であるが、それゆえに復一の「偶像」である真佐子に何の影響も与えず、真佐子が「偶像」であり続けてくれるのならば安心できるのだという。

復一は真佐子を「偶像」視しており、「花は勁し」のように性愛の対象として描かれてはいない。この点では差異があるものの、共通する点もある。「花は勁し」の桂子と小布施が互いに恋愛感情を抱きながらも結ばれなかったように、「金魚撩乱」の真佐子と復一も結ばれることはない。

「金魚撩乱」の場合は、真佐子と復一がお互いに恋愛感情を抱いているわけではなく、〈子〉から〈母〉への恋愛感情のみが描かれているが、「花は勁し」と同様の結末になっているのだ。

③「渾沌未分」

次に「渾沌未分」の貝原と小初の恋愛感情について見ていく。

小初は貝原の申し出を受けることも断ることもせず、ただ距離をとる結末が描かれている。小初の貝原への好意について、先の引用の他にも次のような描写がある。

自分への興味のために、父の旧式水泳場をこの材木堀に無償で置いて呉れ、生徒を世話して呉れたり、見張りの船を漕いで呉れたりして遠巻きに自分に絡まっている材木屋の五十男貝原を見直して来た。必要がいくらかでも好みに変つて来たのであろうか。小初は自分の切ない功利心に眼をしばだいた。

家が貧しくなつていき、それを立て直すために貝原を「必要」として小初の「功利心」に着眼すれば、小初は貝原に恋愛感情を抱いていないととれる。

しかし傍線部を見ると、「必要」が「好み」に変化した可能性が示唆されており、小初は貝原を愛しはじめたとも読むことができる。小初の心情が揺れ動いている様子が確認でき、したがって恋愛感情の有無が断定できない。ただし、申し出を受けようか迷っている以上、貝原が恋愛の対象であることは分かる。

また、結末部に近い場面には次のようにも書かれている。

自分は薫をさまざまで愛しているとは思わない。それなのに何故こうまで薫の肉体に訣れることが悲しいのか、単純な何の取柄もない薫より、世の中をずっと苦勞して来た貝原にむしろ性格の頼み甲斐を感じるのに、肉体ばかりは却つて強く離反して行こうとするのが、今日このごろはなおさらまざまざ判つて来た。

薫か貝原かどちらかの選択を迫られた小初は、薫には「肉体」、さらに言えば性的な魅力を感じ、貝原には「性格の頼み甲斐」を感じている。傍線部から、小初は恋人の薫への深い愛情のために貝原を選べないというわけではなく、薫の肉体の魅力から逃れ難いたために貝原の申し出をすぐには受けられないのだと読み取れる。

小初は肉体関係のある²¹⁾薫にだけでなく、貝原にも異性としてふるまっている。貝原とはまだ肉体関係がないものの、小初は貝原に対し「無意識の中にも、貝原に対して異性の畏を仕込んでいた」。薫の肉体的魅力にはとらわれているものの、小初からは薫にだけ異性として接しているわけではない。貝原は小初との子供が欲しいという理由から娶りたいと言っているのだ、性交渉を前提として考えている。程度に差はあるが、お互いへの好意は性的欲求を伴っていると考えられるのである。

すでに述べたように、小初は貝原も薫も選ばない。〈母〉と〈子〉は「花は勁し」「金魚撩乱」と同じように結ばれない結末となっているのだ。また、「渾沌未分」では「花は勁し」と同様に、〈母〉と〈子〉の間に恋愛が描かれている。

以上の検討から、「花は勁し」「金魚撩乱」「渾沌未分」における〈母性〉は、恋愛感情に近いことが分かる。

「花は勁し」「金魚撩乱」「渾沌未分」では全て〈母〉と〈子〉の結ばれない恋愛が描かれており、恋愛が描かれる場合にも性交渉はしない結末となっている。人物の役割が同じであるだけでなく、ストーリー展開も同様であると言えるだろう。

四作品の構造的類似

ここまでの作品横断的な本文読解によって、〈母〉は〈子〉に恋愛感情を抱く存在であり、〈母〉は恋愛感情と母性的愛情の双方を〈子〉に対し抱くのだと言える。

ここから、「老妓抄」での〈母〉・老妓と〈子〉・柚木には恋愛感情があったのかという疑問に立ち返り、「花は勁し」「金魚撩乱」「渾沌未分」との比較を通して、作品の仕組みの上で〈母〉と〈子〉の間に恋愛感情が描かれていることを検証していきたい。

他の三作品とは異なり、老妓が明らかに柚木と恋愛関係にあることを示す本文は見られないものの、柚木とみち子、老妓とみち子のやり取りから、柚木と老妓が恋愛に近い関係であることが窺える。具体的には、次のようなやり取りが描かれている。

みち子は柚木の膝の上へ無造作に腰をかけた。様式だけは完全な流石をして

「どのくらい目方があるかを量ってみてよ」

柚木は二三度膝を上げ下げしたが

「結婚適齢期にしちやあ、情操のカンカンが足りないね」

「そんなことはなくつてよ。学校で操行点はAだったわよ」

みち子は柚木という情操という言葉の意味をわざと違えて取ったのか、本当に取り違えたものか――

みち子は、柚木に対し艶めかしい態度をとっている。他作品でも〈子〉と肉體関係を結ぶ異性が登場したが、「老妓抄」ではみち子はその役割を担っている。続いて

柚木は衣服の上から娘の体格を探って行つた。それは栄養不良の子供が一人前の女の嬌態をする正体を発見したような、おかしみがあつたので、彼はつい失笑した。

「ずいぶん失礼ね」

「どうせあなたは偉いのよ」みち子は怒って立上つた。

「まあ、せいぜい運動でもして、おっかささん位な体格になるんだね」

と描かれている。柚木はみち子に対し「栄養不良の子供」という評価をし、失笑している。みち子は柚木を男性として見て「一人前の女の嬌態」をし、肉體的に結ばれることが可能であると示唆するが、柚木はみち子に性的な魅力を見出してはいない。そして、傍線部は「おっかささん」、つまりみち子の養母である老妓を、柚木が「一人前の女」と判断していることを示してもいる。

その後の場面では、先に述べたように、柚木はみち子との結婚を想像している。老妓はそれに勘付いて

「けれども、もし、お互いが切れっぱしだけの惚れ合い方で、ただ何かの拍子で出来合うということでもあるなら、そんなことは世間にもいくらかもあるし、つまらない。必ずしもみち子を相手取るにも当るまい。私自身も永い一生そんなことばかりで苦勞して来た。それなら何度やっても同じことなのだ」

と、みち子と柚木が恋愛関係になるのを阻むような発言をする。

柚木が度々出奔するようになってからのみち子と老妓は、次のように描かれている。

「おっかさんまた柚木さんが逃げ出してよ」

運動服を着た養女のみち子が、蔵の入口に立ってそう云った。自分の感情はそっちのけに、養母が動揺するのを気味よしとする皮肉なところがあつた。「ゆんべもおとといの晩も自分の家へ帰って来ませんとさ」

みち子は老妓に皮肉な態度をとっており、それに対し老妓は

新日本音楽の先生の帰ったあと、稽古場に行っている土蔵の中の畳敷の小ぢんまりした部屋におひとり残って、復習直しをしていた老妓は、三味線をすぐ下に置くと、内心口惜しさが漲りかけるのを気にも見せず、けろりとした顔を養女に向けた。

というように動揺を見せまいとしている。「いきり立ちでもするかと思つた期待を外された養母の態度にみち子は詰らないという顔をして」いることから、老妓はみち子の思い通りの反応を見せまいとしているように読み取れる。みち子と老妓は、大きな衝突は見せないものの、柚木をめぐって対立しているのである。

みち子が柚木に対し異性として接し、次第に柚木はそれを受け入れていく。老妓は二人が結ばれるのを阻むような言葉を柚木に述べて、そんな老妓にみち子は皮肉な態度をとっている。老妓とみち子が柚木を取り合うかのようなこの構図は、「欲望の三角形」(ルネ・ジラール)とも重なる。そう考えれば、老妓が柚木に恋愛感情を抱いていたとも見られるのだ。

「花は勁し」「金魚撩乱」「渾沌未分」における人物の配置やその関係が類似していることから考えても、老妓と柚木、〈母〉と〈子〉の間には恋愛感情があると見てよいだろう。「老妓抄」において、〈母〉と〈子〉が最終的には結ばれないという結末も、他作品と同じである。なお、柚木は最終的にみち子とも結ばれるわけではない。

〈母〉と〈子〉の間には恋愛感情が描かれるものの、いずれの作品でも二人が結ばれる結末はとられていない。〈子〉には〈母〉以外に肉体関係を持つ相手がいるが、その相手とも何らかの形で別れたり、距離をとったりする。以上が、本稿の読解から明らかになった四作品の共通する点である。

おわりに

構造的に類似したかの子作品——「花は勁し」「金魚撩乱」「渾沌未分」

との比較を行うことで、「老妓抄」の老妓は柚木にとって母のような存在であり、かつ恋人のような存在であるということが証明された。「老妓抄」のみを読むと、本文中でその根拠がどこにあるのか曖昧に見えてしまうが、他作品との重なりに着目することで、その曖昧さを払拭することができた。さらに、「母性」が一般にいう母性的愛情だけでなく、恋愛感情をともなう愛情であることも明らかになった。

前出拙稿でもふれたが、本稿で論じてきた〈母〉と〈子〉の恋愛、距離といった要素は、「母子叙情」(『文学界』一九三七年三月)にも描かれる。かの子と太郎という実在の母子を投影したとみられやすい作品でさえ、かの子の他作品でさまざまに描かれる〈母〉／〈母性〉に着眼することで、これまでとは違った観点から捉えなおすことができるだろう。

注

- (1) 『ゲストハウス』(二〇一三年四月二十五日)
 (2) 保昌正夫氏は「老妓抄〈岡本かの子〉」(『国文学 解釈と教材の研究』一九六八年四月)で「小そのの柚木への対しかたには必ずしも「母性」と恋情をもつては律しきれないものがある。」と述べているが、このような立場をとる論はほとんど見られず、具体的な検討がされていないことを断っておく。
 (3) 「古い」の風景——岡本かの子『老妓抄』と林芙美子『晚菊』(『物語と反物語の風景』田畑書店、一九九三年十二月)
 (4) 『老妓抄』(岡本かの子)(『国文学 解釈と鑑賞』一九八九年四月)
 (5) 武田麟太郎「小説「土と兵隊」——文芸時評——」(『文藝春秋』一九三八

年十二月一日)

- (6) 亀井勝一郎「解説」『老妓抄』新潮文庫、一九五〇年四月)
 (7) 田中厚一氏が「言葉の仇」という幻——岡本かの子『老妓抄』論」(『帯広大谷短期大学紀要』二〇〇〇年十月)で指摘する通りである。
 (8) 「岡本かの子」(『女流作家であることの意味と限界』(『国文学 解釈と鑑賞』一九六二年九月)
 (9) 「岡本文学における女性の生命力——「花は勁し」「老妓抄」を通して」(『宮城学院女子大学大学院会誌』二〇一〇年三月)
 (10) 『文芸』(一九三八年四月)
 (11) 「渾沌未分」(岡本かの子)を読む」(江種満子・漆田和代編『女が読む日本近代文学』新曜社、一九九二年三月)。また、近藤華子氏が『渾沌未分』——小初の希求したもの——(『岡本かの子 描かれた女たちの実相』翰林書房、二〇一四年十月)で、同様の立場で論じている
 (12) 徐蕾氏が前掲論文・注(9)にて、本文の検討を行っている。氏は桂子と小布施、老妓と柚木の関係は恋愛か否かという点で異なっていることや、桂子と老妓の年齢による人物像の差異を指摘している。少なくとも金銭の援助に関しては老妓と桂子、柚木と小布施が同じ役割を担っていることは明らかである。
 (13) 瀬戸内晴美「かの子撩乱」(『瀬戸内寂聴全集 第二巻』新潮社、二〇〇一年三月)など。
 (14) 「岡本かの子「金魚撩乱」——自然美と人工美」(『昭和女子大学大学院日本文学紀要』二〇〇二年三月)
 (15) 本文の引用は、『岡本かの子全集 全十二巻』(ちくま文庫、一九九三〜一九九四年)により、ルビは省略した。

- (16) 小椋草子氏が「岡本かの子『金魚撩乱』論」(『湘南文学』二〇〇一年三月)で「鯨」にふれ、母の不在について論じている。また「鯨」での〈母〉の描かれ方については前出拙稿で考察した。
- (17) その他、作品への文学者の登場という共通点もある。「老妓抄」では老妓が「老妓抄」の作者に和歌の添削を依頼しているし、「花は勁し」では女流文学者のK——女史、「金魚撩乱」では詩人の藤村女史、「渾沌未分」では女流文学者の豊村女史が登場する。また「母子叙情」のかの女も文学者である。
- (18) 「母性の闇を見る——先端生殖技術から岡本かの子まで」(『岡本かの子のちの回帰』翰林書房、二〇〇四年十一月)。かの子は「母子叙情」により「母性礼賛の作家と見なされたのだろう」が、「花は勁し」「老妓抄」「河明り」なども含めて「かの子の母性観、母性探求を論じた議論はまだなされていない」ことも指摘している。
- (19) 「かの子と葦平(文芸時評)」(『文芸』一九三八年四月)
- (20) 「岡本かの子『花は勁し』における〈身体感覚〉」(『解釈』二〇一一年七月)
- (21) 瀬戸内晴美「かの子撩乱」(前出)や漆谷明彦「岡本かの子——渾沌未分の位置——」(『女流文芸研究』一九七三年八月)では、小初と葦には性交渉がない、小初は処女であるとされるが、本文には「去年の夏から互に許し合っている水泳場近くの薄給会社員の息子葦少年との小鳥のような肉体の戯れ」
「葦と男女関係まであることを知ったなら父の最後の誇りも希望も捲り落されてしまうのである」と書かれている。
- (22) この点は、前出拙稿で取り上げた「川」にも通じる。〈母〉である直助はかの女に恋愛感情を抱いていたが、かの女は他の男と結婚している。